

学び合いの場としての地域日本語教育 ーミャンマー出身・難民的背景のある人々との VEC 日本語活動よりー

松尾 慎、五嶋 友香、澁谷 こはる、東樹 美和、西村 愛、矢部 紬
(Villa Education Center)

要約

本稿は、VEC 日本語活動に関わる当事者が、主に 2 つの観点から省察を行い、論じている。

1 点目の活動におけるファシリテーターの学びと成長」においては、「①行為の熟達」、「②実践（共同体・他者）についての理解」、「③アイデンティティについての理解」という 3 つの観点で、実践共同体としての VEC への参加を論じた。この共同体を理解し、活動の中で一部分の役割を担い、次第に活動全体をデザインするようになることで、参加形態とアイデンティティが変化していく。この変化が「行為の熟達」への過程であり、そこにファシリテーターの学びがあると結論づけた。また、実践への参加を通して、豊かな個人としての成長もみられることを明らかにした。

2 点目の「活動における多文化社会コーディネーターの役割」においては、毎回の活動内容をコーディネートしていく役割、活動を中長期的に継続させていく役割、人材を育成し輩出していく役割などに関し、論じた。

キーワード：対話、学び合い、自己成長、ファシリテーター、多文化社会
コーディネーター

1. はじめに

地域日本語教育とは、各地域の国際交流協会や市民活動の団体などが主催している日本語教室において、日本語を学習したいという（多くの場合）海外ルーツの人々に対し、

日本語学習の機会を提供するものである。文化庁によれば、2022 年 11 月現在、日本国内の日本語学習者総数は、219,808 名である。そのうち、国際交流協会で 19,601 名、任意団体等で 29,206 名が学んでおり、地域日本語教室で学んでいると思われる学習者が 22.2%を占めている。このことからわかるように、地域日本語教育は一定の役割を果たしているといえる¹。それでは、日本における日本語教育において、地域で行われる日本語教育はどのような役割を果たし得るのであろうか。地域日本語教育に関し、山田（2018）は、「社会教育」としての「社会の変革を目指した相互学習」と、「補償教育」としての「社会への参加を目指した言語習得」の 2 つの役割があると述べている〔山田：2018〕。山田によると、前者は本来、地域住民（ボランティア）同士の「地域日本語活動」であり、共に「共生社会」の創造（「社会の変革」）を目指すものであるという。また、後者に関し、必要な日本語能力獲得は、社会生活における様々な場面に十全に参加できるよう、適切な態勢、コースデザインによって、運用能力開発の専門家集団が行うべきであると指摘している。

本稿でとりあげる VEC 日本語活動（VEC=Villa Education Center）は、2014 年にビルマ（ミャンマー）出身の難民当事者と日本語教育の専門家が協力して立ち上げ、運営してきた市民団体である。VEC 日本語活動では、山田が指摘している主に前者の「共生社会」の創造を目指しながら、第二言語としての日本語運用能力の向上にも取り組んできた。本稿では、この日本語活動に関わる当事者が、以下の 2 点に関し省察をし、論じていきたいと思う。

- （1）活動におけるファシリテーターの学びと成長
- （2）活動における多文化社会コーディネーターの役割

次節以降、まず、日本在住のミャンマーコミュニティや日本の難民受け入れ、難民に対する日本語教育の実情、VEC 日本語活動の概要に関し述べていくこととする。

2. 日本在住ミャンマー人の背景

出入国在留管理庁によれば、日本に暮らしているミャンマー人は、2022 年 6 月現在、47,965 人²で、条約難民として認定を受けた人は 389 名（2022 年末現在）となっている。日本にミャンマー出身の難民が来るようになった背景は、1988 年 8 月 8 日、当時の独裁政権の打倒を掲げた民主化運動がミャンマー全土に広がったことがきっかけである。

「8888」と呼ばれる一連の運動では、軍の弾圧によって数千人ともいわれる一般人や僧侶が犠牲になった。多くの民主化運動家がミャンマーを離れたが、その行き先の一つが日本であった。2023 年現在、日本在住のミャンマー出身者のなかには、難民的背景のある人、帰ることのできる国をもたない人々が存在している。とりわけ、2021 年 2 月 1 日に起こった軍事クーデター以降は、ミャンマーに帰るという選択肢が非常に狭まっている状態が続いている。さらには、ミャンマーでは安心、安全に暮らすことができないことを理由に、日本に在住している親類を頼り来日し、日本に住み始める若年層も目立っている。

3. 日本における難民受け入れの状況と難民的背景をもつ人々に対する日本語教育

日本では、2022 年、難民認定を求めた 10,345 名のうち難民認定を受けた人は 202 名であり、難民認定率は 1.95%に過ぎない。それでも、1.95%という結果は、この 10 年間のうちでは非常に高い認定率となっている。1979 年に日本政府の委託により、難民事業本部（RHQ）が設立された。RHQ 支援センターでは、難民とその家族を対象とした定住促進業務が行われている。難民認定を受けたごくわずかな人々は、RHQ 支援センターで、無償で 572 時間の日本語教育と 120 時間の生活ガイダンスを受けることができる。しかし、難民認定を受けられない外国人は、こうした公的な学習支援を受ける機会がなく、人道上の配慮を受け、在留特別許可³を得た外国人も RHQ 支援センターで学ぶことはできない。しかしながら、母国への帰国が困難な人々は、難民認定を受けるか否かにかかわらず、日本社会の中で生活の基盤を築いていくためにも日本語の習得が必要となる。

難民認定申請者が日本語を学ぶ機会をなかなか得られない状況を何とか補おうと努めているのが市民団体や NPO などが運営している教室である。本稿で以下、取り上げる VEC 日本語活動もその一つである。

4. VEC 日本語活動の概要

日本在住のミャンマー出身者が集う町の一つが東京都の高田馬場である。高田馬場駅の近くにある 20 軒ほどの店でミャンマーの様々な料理が提供されている他、ミャンマーの食材の店なども少なくない。VEC 日本語活動は、この高田馬場のアパートの一室で活動をしている。

VEC 設立者のチョウチョウソー氏は 1991 年に来日し、1998 年に難民認定を受けた。NHK のビルマ語放送のキャスターを務める傍ら、日本でミャンマーの民主化活動を続け

できた。また、2002 年に高田馬場にミャンマー料理レストランを開店し、ミャンマーにつながりのあるすべての人にとって大切な場として機能している。ビルマ語はもちろん、日本語や英語での発信能力が非常に高いチョウチョウソー氏は、日本語を学ぶ機会がなかなかない同胞が安心、安全に日本語を学べる場を提供するため、日本語教室を開こうと考えた。そのとき、ある難民支援関係者を介してチョウチョウソー氏と日本語教育の専門家でもあり多文化社会コーディネーターでもある（本稿の著者の一人である）松尾が出会い、2014年6月、VECを立ち上げた。この活動は、難民「当事者」と「日本語教育専門家」・「多文化社会コーディネーター」が連携し、対等なパートナーとして、立ち上げたところに特質がある。

VEC 日本語活動は、毎週日曜日の午前 10 時から正午までの 2 時間、行われている。2023 年 11 月 19 日現在で活動は 411 回続いている。東京女子大学で日本語教員養成に携わっている教員の他に、同大学の大学院で日本語教育を専攻している大学院生や大学院修了生、学部の日本語教員養成課程を受講している学生や課程の修了生、その他の日本語教育関係者などがファシリテーターを務めている。また、東京女子大学以外の学生や社会人、日本語教育関係者など様々な人々が、ビジターとして活動に参加している。2022 年頃からは、ミャンマー出身の参加者だけではなく、中国やインドネシア、フィリピンにつながる日本語「学習者」も参加しており、教室の多様化がさらに進んでいる。2023 年 11 月現在、毎回の活動には少なくとも 10 名、多ければ 20 名程度の参加者が教室に集う。地域日本語教室では、「ボランティア」と「学習者」がマンツーマンで活動を行っているところが少なくないが、VEC 日本語活動は、すべて参加者全員で行っている。

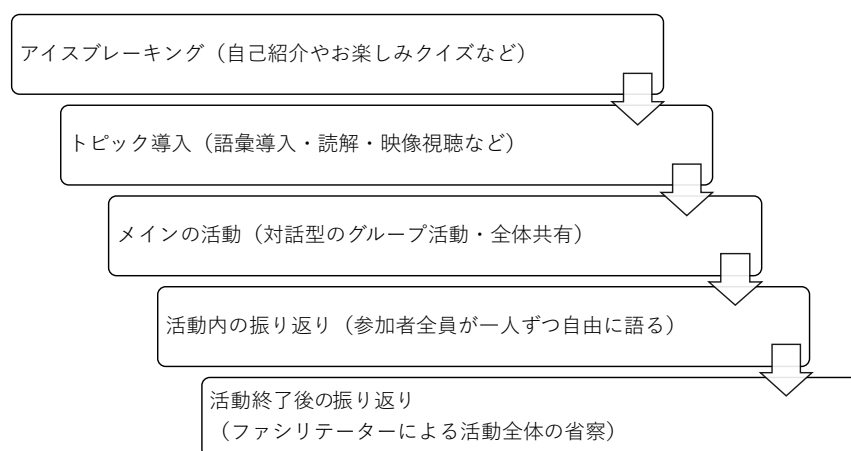


図 1 VEC 日本語活動の活動手順

図1は VEC 日本語活動の手順を示したものである。毎回の大きな活動内容の流れは、アイスブレーキング、トピックと語彙の導入と読解、映像視聴、対話型のメインの活動と続き、最後は活動内の振り返りを行う。トピックはそのときどきのニュースを素材にすることが多い。メインの活動は様々な方法を用いる。例えば、車椅子に乗って町を歩くことによってバリアを実感したり、逆にバリアフリーの取り組みを探したり、災害時などの緊急連絡のために公衆電話を使用する体験をしたこともある。活動の最後は必ず参加者全員がその日の活動に参加して感じたこと、考えたことを一人ひとり振り返って語り、それを全員で共有することで締めくくられる。

活動終了後、ファシリテーターは教室に残り、振り返りを 30 分から 1 時間近く行う。ここでの振り返りは、アイスブレーキングからそれぞれの活動ごとに、活動の狙いや意図、教材などの準備、活動内でのファシリテーションなどに関し、すべての参加者がことばの能力やテーマに対する背景知識の有無にかかわらず活動に十全に参加できるものとなっていたかを検討していく。杉澤（2009）は「活動を共にしたメンバーによる共同での振り返りは、相互の気づきを促す学び合いの場となり実践の質を高めていくものと考えられる」〔杉澤 2009 : 36〕と述べているが、VEC 日本語活動も実践の質を高めていくため、また、一人ひとりのファシリテーターが成長していくために振り返りを大切にしている。

5. VEC 日本語活動における理念と実践のあり方

VEC 日本語活動は、「すべての人が公正に生きられる社会の実現」を理念に、そして、「参加者全員が対話を通して学び合い、自己成長すること」を活動の目標にしている。また、VEC 日本語活動では、特定の参加者が支援し、特定の参加者が支援されるという固定的な関係性ではなく、集う人すべてが対等に「学び合う」活動が志向されている。日本語能力やコミュニケーション能力を養う場、社会的課題や様々なテーマに対する見方・考え方を広げる場、日本語教師やファシリテーター、コーディネーターとしての力量形成をはかる場など、すべての参加者の学び合いの場となることを目指している。

図2は VEC における日本語教育の在り方を図に表したものである。

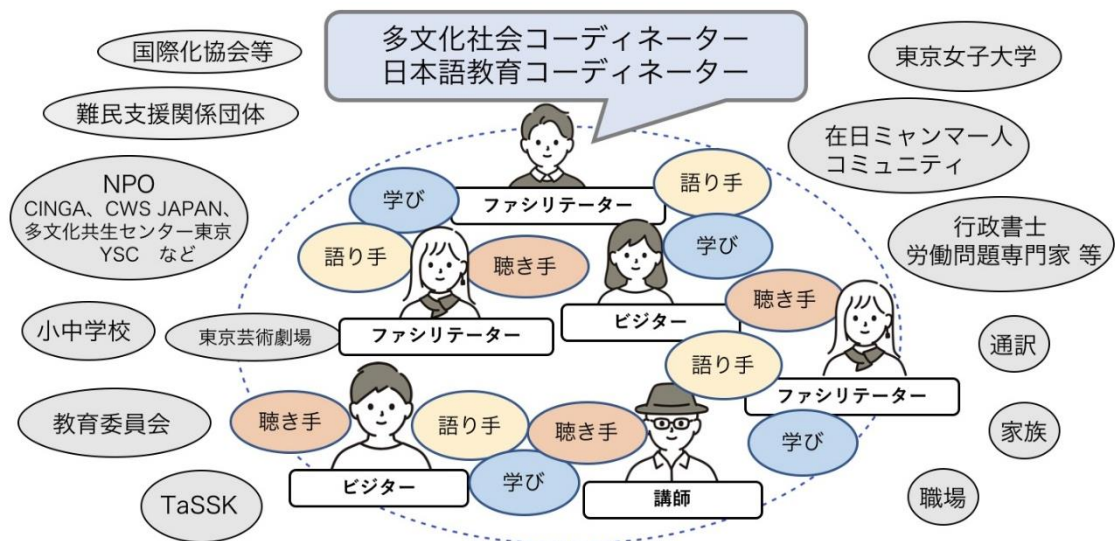


図2 VECにおける日本語教育の在り方について

参加者全員が VEC の対話活動の中で、あるときは語り手になり、あるときは聴き手になる。このように、一人ひとりの参加者が多様な役割を果たしている。図2には、ファシリテーターも一参加者として、学び手、聴き手として学び合いのコミュニティの一員になっていることが示されている。ゲスト講師を招く回も、講師の語りを参加者全員が聴いて学び、また参加者の語りから講師が学びを得ることもある。このようにして、VEC では参加者全員による学び合いが生じている。また最近では、東京芸術劇場のファシリテーターとコラボして活動を行うこともあるため、図2では東京芸術劇場を実践共同体の一部として位置づけている。松尾は、ファシリテーターの一人であるとともに、多文化社会コーディネーターとして、VECの日本語教育活動全体をコーディネートしている。以下、6節、7節では、筆者たちがそれぞれ、その実践を省察していく。6節に登場するAからDは筆者である。6節では、「活動におけるファシリテーターの学びと成長」について省察していく。7節では、「活動における多文化社会コーディネーターの役割」について省察していくこととする。

6. 活動におけるファシリテーターの学びと成長

6-1. 「実践共同体」としての VEC とファシリテーター

本節では、ファシリテーターである大学院生や大学院修了生の学びと成長について述べる。

レイヴ&ウェンガー（1993）は、学習を共同体への参加の度合いとみる正統的周辺参加論を提唱した。VEC 日本語活動においては、「毎週日曜日の 10 時から正午までの日本語活動」を参加者全員で共有している。加えて、ファシリテーターは、この活動に伴う準備時間と活動終了後の振り返り（ファシリテーターによる活動全体の省察）もコーディネーターである松尾や他のファシリテーターと共有している。そのため、ファシリテーターにとっては、準備段階から活動終了後の振り返りまでが「実践共同体」であるといえる。VEC 日本語活動では、5 節の図 2 で示したように、参加者一人ひとりに多様な役割があり、その役割は実践への参加形態により変化している。多くの大学院生や大学院修了生は、まずビジターとして活動に参加することで地域日本語教育の現場を体験する。それから、コーディネーターや「センパイ」ファシリテーターからファシリテーションを学び、活動内で少しずつ「担当」を担っていくことになる。初めは「アイスブレイキング」や「トピック導入」を担当することが多い。「アイスブレイキング」では、あたたかい雰囲気場のつくり方や「アイス」を「ブレイク」させる方法を学び、「トピック導入」では、取り上げるニューストピックの内容や語彙の説明方法を学んでいく。このように、ファシリテーターの見習いとして、段階を踏んで経験を積み、活動全体の構成を考える主担当としてデビューする日に向けて準備を進めていく。

ここまでは VEC 日本語活動における実践共同体の範囲と、ファシリテーターの VEC 日本語活動への関わりについて述べた。次節では、VEC 日本語活動という「実践共同体」において、ファシリテーターの関わりがどのように変化しているのかを論じる。

6-2. ファシリテーターの「実践共同体」における関わりの変化

高木（2001）は、正統的周辺参加論において、「行為の熟達化、コミュニティについての理解、他者についての理解、そしてコミュニティのメンバーとしての自己についての理解（アイデンティティ）の相互構成的な変化」[高木 2001:105] が伴うと述べている。ファシリテーターの参加を高木（2001）の正統的周辺参加論の解釈に基づいて考えると、実践共同体への参加には、「①行為の熟達」、「②実践（共同体・他者）についての理解」、「③アイデンティティについての理解」の 3 つの変化が伴うものと捉えられる。以下、この 3 つの観点で、VEC 日本語活動におけるファシリテーターの実践共同体への参加を論じていきたい。

まず、主に「①行為の熟達」と「②実践（共同体・他者）についての理解」の観点で省察していくこととする。

正統的周辺参加論では、より深く実践に関与するようになることが「行為の熟達」であると考えられている。活動を通じた対話、学び合いに加え、ファシリテーターはビジターからファシリテーターへと参加形態を変化させ、何らかの役割を担うようになるが、この参加形態の変化自体が「行為の熟達」の過程であると考えられることができる。

ファシリテーターにとって重要なことには、参加者一人ひとりにあった学びをサポートするために常に目を配ること、さらにはすべての参加者が安心して学び合える場づくりをすることなどが挙げられる。前述したように、VEC 日本語活動には 2022 年頃から、ミャンマー出身の参加者だけではなく、中国やインドネシア、フィリピンにつながる日本語「学習者」も参加するようになった。さらには、出身国や地域の違いだけではなく、学習経験も日本語「レベル」もより多様になった。そのため、その回の参加者の顔ぶれをみて説明の程度や、手段・方法を選択したりするようになった。参加者全員が十全に参加できるように、よりわかりやすい日本語で説明したり、カタカナの言葉に英語の意味を併記したり、イラストや映像を見せたりすることもある。また、自分のノートパソコンの画面で PowerPoint を参加者に見せるときに、パソコンの持ち方や角度、文字の大きさやフォントの種類、1 枚の PowerPoint のスライドに必要以上の情報量を入れすぎないように注意することなどもコーディネーターやセンパイファシリテーターからコメントを受けて学び、経験を積んでいく。このように参加者によってことばのわかりやすさに違いがあることに気づいたり、活動全体を見る視野を広げたりする過程が「学び」となり、それ以降の活動でもこれらの学びに基づいてファシリテーションを行うようになる。このようなファシリテーターの学びの過程は、「行為の熟達」に加えて、VEC 日本語活動という「実践（共同体）についての理解」につながっていると考えられる。

ファシリテーター C が VEC 日本語教室にファシリテーターとして参加し始めたばかりの頃は、センパイであるファシリテーター A やファシリテーター B に活動の準備段階でサポートをしてもらっていた。ファシリテーター C がはじめて担当したのは、2021 年 6 月 13 日のアイスブレイキングの「ミャンマークイズ」であった。ミャンマーの食べ物やスポーツ、有名な場所などを取り上げ、ミャンマーのことをよく知っている参加者も、そうでない参加者も楽しんでもらうことを目的とした。まだミャンマーに詳しくなかったファシリテーター C は、準備の段階で、ファシリテーター B にミャンマーのお正月の祭り「水

かけ祭り（ダジャン祭り）」に参加したときのことについて話を聞いたり、ミャンマーで日焼け止めや化粧品などとして顔や体に塗る「タナカ」についても教えてもらったりした。また、ファシリテーションをするときには参加者に説明をしてもらう機会をつくり、参加者同士の対話を促す大切さについてもセンパイファシリテーターから学んだ。その日の「活動終了後の振り返り」には、以下のように記されている。

「今回は、クイズを通してミャンマーの方と交流ができるような活動にしたかった。しかし、クイズが簡単すぎたこともあり、話し合いの時間をうまくつくれなかった。ミャンマーのクイズなので、ミャンマーの方々に詳しく説明をしてもらうことができたのはよかったと思う。」（2021年6月13日の「活動終了後の振り返り」から抜粋）

このように、改善点はあったものの、ファシリテーターとしての一歩目を踏み出すことができた。センパイファシリテーターのサポートのおかげである。また、活動準備の際だけでなく、活動中にセンパイファシリテーターのファシリテーションのポイントや対話の広げ方などを体験し、学ぶこともできた。ファシリテーターCは、2023年11月時点で約2年半 VEC 日本語活動にファシリテーターとして参加していることになる。振り返ってみると、当時センパイファシリテーターAやBに教えてもらったことやアドバイスしてもらったことは、現在のファシリテーションの土台になっていると感じる。現在はファシリテーターC自身がセンパイとなり、コウハイの活動準備を手伝ったり、アドバイスをしたりする場面が増えた。その中で、自分では思いつかなかったクイズのアイデアや話題の広げ方を見て、コウハイや同期のファシリテーターから学ぶことも多くある。つまり、VEC 日本語活動に長く関わっているかどうかに関わらず、お互いに高め合える関係を築いているのである。このようなファシリテーター同士の関わりによって、VEC 日本語活動ではファシリテーター一人ひとりの「経験」が引き継がれているのである。

ファシリテーターとしての参加経験が、「行為の熟達」、「実践（共同体・他者）についての理解」の変化を促したと述べたが、ファシリテーターとしての参加を重ねることは、活動全体を意識するようになることにもつながる。つまり、はじめはワークシートの中で自分が担当する部分の準備をするというかたちで活動に関わっていたのが、次第に主担当の役割であるトピックの選定、ワークシートづくりも担うようになる。

レイヴ&ウェンガー（1993）は、「実践共同体の十全的成員となるには広範囲の進行中

の活動、古参者、さらに共同体のほかの成員にアクセスできないといけない」[レイヴ & ウェンガー1993 : 84] と述べている。ファシリテーターは、VEC 日本語活動に参加することで進行中の活動や「古参者」である松尾やセンパイファシリテーターにアクセスが可能となっており、ワークシートの作り方やトピックの選び方、話題の広げ方などを、実践を通して学んでいる。「古参者」と実践をともにし、学んでいく過程で起こる役割の変化に関しては、VEC 日本語活動という実践共同体を理解し、自らの行為を変化、熟達させていっている点に、ファシリテーターの学びがあるといえる。

さらに、ファシリテーターは、その日に参加したファシリテーター全員で「活動終了後の振り返り」を行っている。「古参者」やほかの成員からフィードバックを得られる上、活動を進行するにあたって工夫した点や意図を共有することで、VEC 日本語活動への参加経験の長短に関わらず、すべての人にとって学びの時間となっている。このような「活動終了後の振り返り」と、ファシリテーターだけではなく参加者全員が一人ずつ自由に語る「活動内の振り返り」は、これまで活動を行ったすべての回の分を電子ファイルにまとめ、保管されている。そのため、ファシリテーターは過去の振り返りの内容にいつでもアクセスが可能である。ファシリテーターは、自分が活動に参加していなかったときの振り返りにもアクセスできるため、過去の振り返りを遡って得られる気づきも多い。例えば、環境問題や防災関連のトピックは例年取り上げているが、これらをトピックとして選ぶとき、これまでの活動内容を見直し、参考にすることが多い。そのときの振り返りを見直すことで、どのような内容や流れで活動を進めたのか、参加者の反応や盛り上がりはどうだったのか、改善すべき点はあったのかなどを確かめることができる。また、参加者全員の振り返りが記録されている「活動内の振り返り」を見ていくと、ある「学習者」が日本語で話す際に使う語彙やフレーズが活動を重ねるごとに増えていることもわかる。このように、過去の振り返りにいつでもアクセスが可能となっていることで、ファシリテーターは「実践（共同体・他者）についての理解」をより深めることができる。参加回数を重ねることで、活動全体を意識するようになり、振り返りをさらに振り返ることで、「行為の熟達」が広がる。そして、この「実践（共同体・他者）についての理解」と「行為の熟達」の広がり、あるファシリテーターだけの学びで終わることなく、次の世代、そのまた次の世代のファシリテーターにもつながっていくと考えられる。

以下では、主に「③アイデンティティについての理解」について省察する。7 節では、VEC 日本語活動を統括する立場（コーディネーター）について「日本語教育に関わる人

材を育成し、輩出していく役割」が述べられているが、大学院生や大学院修了生などのファシリテーターも VEC 日本語活動を継続させていくために「コウハイ」につなげる役割を担っている。前述したようなファシリテーターとしての自身の成長を実感しているからこそ、日本語教育を学ぶ「コウハイ」にもその学びを共有したい、学び合いの場である VEC 日本語活動を広めたいという想いが、コウハイにつなげる行為に結びついている。

ファシリテーターA は、VEC 日本語活動で得た学びを「コウハイ」に伝えるために、これまでの学びを振り返った。見習いファシリテーターのときは、トピック導入のなかの語彙導入と読解をセンパイファシリテーターとともに準備をし、担当することが多い。ファシリテーターA がコウハイとともに準備をしたとき、自分が語彙導入と読解の担当を持ち始めた頃にセンパイファシリテーターやコーディネーターからアドバイスをもらった点を思い出しながら、コウハイに伝えた。例えば、活動の中で「学習者」にとって身近な具体例を出すことである。ミャンマーや中国、インドネシアの有名な行事や祭り、食べ物などを提示したり、学習者の趣味や経験に関連づけたりすることで、より自分事として考えることができる。加えて、すべての学習者が理解できそうなことばを選ぶこと、語彙の意味を文脈のなかで説明すること、PowerPoint のスライドに載せるイラストや写真は抽象的なものを選ばないことなどにも言及した。また、前述したパソコンの持ち方や角度、文字の大きさやフォント、1 枚の PowerPoint のスライドに必要以上の情報量を入れすぎないこともコウハイに伝えた。読解の本文に関しては、本文を読むスピードを意識することや段落で少し間を空けることもアドバイスした。そして、コウハイファシリテーターが徐々に語彙導入と読解の担当に慣れてきたら、時間配分に気を付けることや、準備した通りに実践するのではなく学習者や参加者の状況に合わせて必要な情報を取捨選択することなどもアドバイスした。ファシリテーターA は現在もファシリテーターの技術を学んでいる過程であるため、すべてのことが完璧にできるわけではない。しかし、コウハイが VEC 日本語活動に加入したタイミングで、これまで自分がコーディネーターやセンパイファシリテーターから学んだことをコウハイに伝えたことで、さらに自分の成長につながったと感じている。

このように、ファシリテーターA は自分の中に落とし込んであった学びを、実践共同体における「新参者」であるコウハイにも分かるように言語化し、どのタイミングで何を伝えるかを考えた。この過程は、このファシリテーターにとってアイデンティティのターニングポイントであった。これまでは自分が「コウハイ」であり、センパイファシリテータ

一から学びを得ることのほうが多かったが、今度は自分がセンパイファシリテーターになり、「コウハイ」につなげる役割を担っていく。VEC 日本語活動への継続的な参加は、「ビジターであるわたし」から「ファシリテーターであるわたし」、そして「コウハイ」から「センパイファシリテーター」へとアイデンティティを変容させている。このアイデンティティの変容の過程には、VEC 日本語活動という実践の理解、役割の変化（行為の熟達）があると考えることができる。

また、ここではファシリテーターCのVEC日本語活動への参加形態、アイデンティティの理解の変容について例を挙げる。ファシリテーターCは、学部2年次に初めてVEC日本語活動に参加した。その後、すぐにファシリテーターを目指して参加し始めたのではなく、学部4年次の春頃に再訪し、そこから現在まで継続して参加している。初めはビジターとして参加していたが、2回、3回と参加を重ねるうちに、アイスブレーキングやトピック導入の役割を担うようになった。初めて活動の一部を担当した際は、使用する語彙レベルのコントロールや、PowerPointを見せる際のパソコンの角度など、思うようにできない部分が多かったが、活動終了後の振り返りにも参加したことでそれらの課題を一つずつ改善していき、ファシリテーターとしての経験を積んでいった。このように、ビジターという立場から徐々に「ファシリテーター」という立場へと参加形態を変化させる過程で、自身のアイデンティティも変化していったといえる。また、VEC日本語活動における自身のアイデンティティは、主担当デビューをしてからも日々変化していると感じている。それは、VEC日本語活動という実践共同体への参加回数を重ねることで、共同体の成員との関係性が変化しているからであると考えられる。活動時間外に参加者と日常的な会話をすることが増えたり、活動内容についてより深く話したりすることもある。ファシリテーターは、ファシリテーター同士の関係だけでなく、参加者全員との関係性を構築していくことで、VEC日本語活動におけるアイデンティティが形成、また変化していくといえる。

このように、参加形態の変化に伴い、VEC日本語活動という「共同体の一部になる」[レイヴ&ウェンガー1993：97]ことを実感したことは、ファシリテーターにとってVEC日本語活動への参加の価値のもっとも深い意味となっているといえる。

6-3. ファシリテーターの「実践共同体」における豊かな個人としての成長

VEC日本語活動には様々な背景や知識を持った人が参加するため、参加者との対話の

なかで得られる学びも多い。これまで自分の中にはなかった意見や考えに触れることで視野が広がり、豊かな個人として成長することができる。ここでいう豊かな個人としての成長は、上記 6.2 で述べた「ファシリテーターとしての実践共同体における関わりの変化」に伴うものである。レイヴ&ウェンガー（1993）は、実践共同体のメンバーについて「成員は異なる関心を寄せ、活動に多様な貢献をし、様々な考えをもっていると考えられる。私たちの見解では、多層的レベルでの参加が実践共同体の成員性には必然的に伴っているとする」[レイヴ&ウェンガー1993：80]と述べている。VEC 日本語活動を一つの実践共同体として考えると、成員とは、日本語学習者、ファシリテーター、コーディネーター、ビジターなどである。VEC 日本語活動では、成員のひとりであるファシリテーターが、ファシリテーターとして成長していく過程において様々な意見や考えを持った他の成員と対話することで、豊かな個人としても成長していく。

VEC 日本語活動では、社会的な課題をテーマとして取り上げることが多い。参加者一人ひとりがしっかりとテーマに向き合い、活動で参加者と対話することで、自分自身がそのテーマに対してどのような意見や考えを持っているのかが見えてくる。

ここで、上記に関して具体的な例を挙げる。2022 年 3 月 20 日の回では、「ヤングケアラー」を取り上げた。関連する文章を読み、実際にヤングケアラーだった男性の映像を見た。映像に登場した男性は、子どもの頃から 20 年以上にわたり祖母と母の介護を担っていた。男性が祖母と母の介護をしていた 20 年間は、仕事をすることができなかったため、新たに仕事を探そうとしても履歴書に記入することがなく、傍から見ると空白の 20 年のように受け取られてしまう様子が紹介されているものだった。このような映像を見たあとに、どのようなことを感じたかを参加者同士で共有し合った。この回に参加していたファシリテーター D は、「子どもが家族の介護をすることが絶対悪だとは思わないが、それでも介護をしていた 20 年間、自分の人生を生きることができなかった男性に対して、『かわいそう』という感情と、それだけでは済ませられない、言葉にできない思いを感じた」と感想を述べた。この発言に対してミャンマー出身の参加者は以下のように話した。

「日本人は、今日のようなドラマを見ると、『かわいそう』という気持ちになる。しかし、人生は長いから人生が終わるとは思わない。自分を信じて頑張れば、ヤングケアラーにも未来があると思う。」（2022 年 3 月 20 日の「活動内の振り返り」から抜粋）

この意見を聞いたファシリテーターDは、問題に直面している人に共感することはもちろん大切であるが、「かわいそう」と同情するだけで終わりでは、「自分とこの人は違う」と線引きすることにもかりかねないという気づきを得た。また、ヤングケアラーの人、ヤングケアラーだった人が社会に参画できるように努力をするだけではなく、そのような人々が活躍できるように、社会の側がアプローチしていくことも必要だと考えることもできた。ミャンマー出身の参加者が自分の考えを自由に発言でき、それを聞いたファシリテーターがこのような学びを得られたのは、VEC が大切にしている「対等性を保った上で学び合う」という理念が可能にしたものだといえる。

上記のような豊かな個人としての成長は、ファシリテーターとして次回以降の活動をデザインする際にも有効的に作用する。例えば、ヤングケアラーについて取り上げた回に参加していたファシリテーターDは、その次の回で主担当を務めた際、活動テーマとして「学校教員の長時間にわたる残業」を選んだ。その際、ヤングケアラーを取り上げた回で学んだ「教員の仕事量が多すぎて余裕がなく、ヤングケアラーになっている児童、生徒のSOSに気づけない」という側面を取り入れ、「子どもたちへの教育」について様々な立場から学び合えるような活動を考えた。実践における学びが、ある日の活動だけで終わるのではなく、それ以降の活動にもつながっていることは、ファシリテーターのみならず活動に参加するすべての人のさらなる学び、豊かな個人としての成長を促すことにつながっている。

次に、ファシリテーターBの例を挙げる。2022年3月13日の回では、ゲストを招き活動を行った。活動の詳細を述べる前に、ファシリテーターBとゲストとの出会いについて述べたい。ゲストは、「YANGON かるた⁴」プロジェクトの代表である野中優那さん（以下、野中さん）である。野中さんは、2021年2月にミャンマーで起こった軍事クーデターの際、ヤンゴンに暮らしており、その後高校進学のため日本に帰国した。現在、ミャンマーで戦っている人々が、どのような生活をしていたのか、穏やかで素敵なミャンマーを知ってほしいとの思いで「YANGON かるた」プロジェクトを立ち上げた。かるたの絵札には、プロジェクトメンバーやその知人により撮影されたミャンマーの風景や料理などが使われており、読み札もミャンマーにまつわるものである。このプロジェクトの存在を知ったファシリテーターBは、ぜひVECに招き、野中さんの語りを聴き、YANGON かるたの体験をしたいと考え、プロジェクト団体に連絡をした。そのお願いを快く承諾していただき、ファシリテーターBと野中さんとの交流が始まった。

その日の活動トピックは、当時、連日ニュースで取り上げられていたロシアのウクライナ侵攻であったが、ニュースを読んだり見たりするだけではなく、野中さんの語りや YANGON かるた体験を取り入れた。YANGON かるたの絵札を見ながら、参加者同士でどんな写真であるか活発なやり取りがなされた。当時 VEC に参加してまもないミャンマー出身の参加者も、母国について自分のことばで積極的に発言している姿が印象的であった。活動内の振り返りでは、あるミャンマー出身の参加者が以下のように話した。

「今日の活動を通して、2 つのことを考えた。1 つ目は、自分の周りで起こっていることで自分に関係ないことはないということ（中略）2 つ目は、自分の力があるかどうかは関係ないということ。自分の能力や知識を使ってできることをすることが大切だし、自分の能力に自信がなかったら、祈ることもできる。」（2022 年 3 月 13 日の「活動内の振り返り」から抜粋）

これまで、ファシリテーターB は、VEC での活動経験はあってもミャンマーに関する知識が十分ではないという考えから、ミャンマーについて発信することができずにいた。しかし、この日の活動や参加者の振り返りから、もっとたくさんの人にミャンマーの状況や YANGON かるたを伝えたい、そのためには今の自分の力でできることをしたらいいとの気づきを得た。そこで、この活動以降、ほかのファシリテーターや YANGON かるたプロジェクトと協働し、東京女子大学や大学がある西荻地域（西荻窪地域）でのイベントを開催した。東京女子大学でのイベントには、学生や教職員、地域住民が参加した。西荻地域でのイベントでは、身近な「食」から関心を持ってもらうこともテーマに据え、YANGON かるたの体験だけではなく、地域住民の協力のもと、ミャンマー料理の提供も行った。それぞれの場や参加者に合わせた活動をデザインできたのは、これまでの VEC 日本語活動でのファシリテーターとしての経験があったからである。さらに、VEC 日本語活動で大切にしている「振り返り」は、各イベントでも参加者に紙に書いてもらう形で行った。イベント参加者からは、「若者たちが自らの国のために希望を持った活動をしていることに感動した。」「大きすぎる課題に自分ごとではないという意識が働いていたと気づかされた。」などの振り返りがあった。これらを通して、ファシリテーターB は、学生や教職員、地域住民がミャンマーについてどのようなイメージを持ち、どのように考えているのかを知ることができた。また、普段関わる人々は、ミャンマーや日本語教育に興味関

心がある人々が大多数だが、そうではない人々に、ミャンマーの現状を知ってもらうにはどうしたらいいのか、そのために今後どのようなことができるのかを考えるきっかけになった。

ひとつ前のヤングケアラーの事例では、実践における学びがそれ以降の活動にもつながっていることが明らかになったが、ここで述べたファシリテーターBの成長からは、その学びが VEC 日本語活動の場だけではなく、実践共同体の外にも広がっていることがわかった。つまり、ファシリテーターが学びを省察し、発信することを通して、その学びが実践を取り巻く地域社会やそこで生活する人々にも伝播していると考えることができる。VEC 日本語活動だけに留まらない交流は、豊かな個人としてのさらなる成長を促し、実践共同体で得られた学びを外に伝播させていくことにつながっている。

6-4. まとめ

本節では、VEC 日本語活動という実践共同体におけるファシリテーターの成長と学びについて述べた。

ビジターであった大学院生や大学院修了生は、活動の一部分の役割を担うようになり、次第に活動全体をデザインするようになることで、参加形態が変化していく。そして、この参加形態の変化自体が「行為の熟達」への過程であると述べた。また、参加形態の変化に伴い、ファシリテーターの学びが広がり、VEC 日本語活動における「実践（共同体・他者）についての理解」が深まっていくことも明らかになった。VEC 日本語活動という一つの実践共同体において、ファシリテーターの学びが「コウハイ」へ受け継がれていくことは、ファシリテーターのアイデンティティをも変化させる。加えて、ファシリテーターとしての成長とともに豊かな個人としての成長があるという点は、VEC 日本語活動の大きな特徴の一つであるといえよう。このような VEC 日本語活動の実践は、図 3 のように表すことができる。

これらのことから、VEC 日本語活動におけるファシリテーターの学びと成長は、活動の実施回数が積み重なることによって、より深いものとなることがわかる。つまり、ファシリテーターが成長していき、学んでいくことは組織としての実践共同体の成長にもつながると考えられるのではないだろうか。

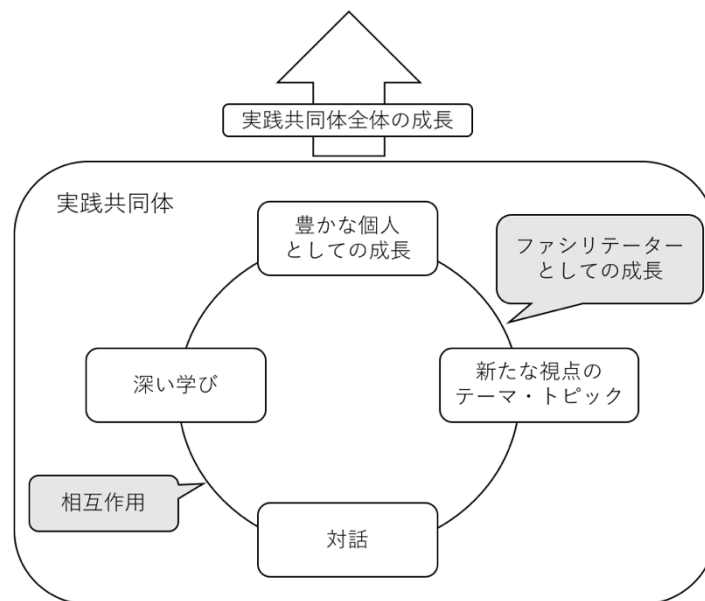


図3 実践共同体全体の成長のイメージ

7. 活動における多文化社会コーディネーターの役割

この活動における松尾の役割は、ファシリテーターとコーディネーターに大別できる。本節では、日本語教育の専門家でもあり、多文化社会コーディネーターでもある松尾がコーディネーターとしてどのような役割を果たしているのか、以下、4点に分けて述べていくこととする。

- (1) 毎回の活動内容をコーディネートしていく役割
- (2) 活動を中長期的に継続させていく役割
- (3) 日本語教育に関わる人材を育成し、輩出していく役割
- (4) 活動内容を社会に発信していく役割

(1)の「毎回の活動内容をコーディネートしていく役割」に関し説明する。6.1でも言及したが、本活動では、活動ごとにその回の活動内容をデザインする主担当が決められている。主担当のファシリテーターがテーマの候補を選び、活動案をコーディネーターと当日参加する他のファシリテーターに提案する。活動当日は主担当以外のファシリテーターも、アイスブレイキングの進行や語彙の説明など、何らかの役割を担う。コーディネーターと当日参加するファシリテーターの全員で、様々なアイデアや意見が交わされる。焦

点となるのは、すべての参加者にとって参加しやすく、学び合える活動内容になっているのか、そして、継続して参加したいと思える活動になっているかという点である。重要なことはこのプロセスが、ファシリテーターの学び合いの場、自己成長の機会となっているということである。松尾以外のファシリテーターは原則的に自分自身が参加する回の準備にしか参加しないが、コーディネーターである松尾は、自身が活動に参加しない回であっても、準備のプロセスに毎回必ず参加している。この点がコーディネーターを兼務する松尾と他のファシリテーターとの役割の違いである。

また、VEC 日本語活動では、ときどき活動に外部からゲスト「講師」を招くことがある。例えば、継承語教育の専門家、中国帰国者 3 世、折紙講師などである。さらには外部団体（例えば、東京芸術劇場や CWS/Church World Service Japan）とのコラボ活動も実施してきた。あるビジター参加者は、「VEC 日本語活動への参加を継続している理由の一つは、学びに来る学習者の方々はもちろん、この活動を支援している多世代・多種多様な方々との出会いがとても大きいこと。もし、ここでの活動が無ければ、実生活では出会う機会もなく、様々な体験や幅広い知識を知り得ることもなかった。『出会いとつながり』が一番の理由である」と述べている。様々な出会いを生み出し、多様な活動を実現するためにも、コーディネーターには多様な「人財」とつながるためのネットワークの広さも求められる。

(2) の「活動を中長期的に継続させていく役割」と (3) 「日本語教育に関わる人材を育成し、輩出していく役割」に関しては、合わせて述べたい。活動を継続させていくために何よりも必要なのは、参加者の確保である。日本語「学習者」を常に募る必要があるが、ファシリテーターの担い手もいなければ活動が継続できない。本活動は、2023 年 9 月に 400 回を迎えることができた。次は 500 回との声も聞こえてくるが、翌年も毎週、活動が継続できているのか、まったく楽観はできない。ファシリテーターの多くは、大学院生が務めている。大学院を修了した後は、多くの修了生が海外の日本語教育機関で活躍しているため、いったんは VEC 日本語活動を「卒業」していく。したがって、活動を維持、継続していくためには、常にファシリテーターを育成していく必要がある。活動に参加し始めてすぐにファシリテーターとしての役割を担うわけではない。何回か継続的に参加したビジターに、何らかの役割をもつことを促すこと、「センパイ」のファシリテーターに「指導」を依頼することなどもコーディネーターの役割となる。また、主担当デビューに関しては、コーディネーターが様子をみて促すことになる。ファシリテーターの育成

に関しては、6.2 でも述べたように、センパイファシリテーターによるところが大きいですが、コーディネーターの松尾が「育成」や「指導」をする場面も存在する。一つは先に触れた毎回の活動の準備のプロセスにおいてである。もう一つは毎回の活動後のファシリテーターによる振り返りの場面である。ときには、パソコン画面の見やすい角度にまで言及する。2023年6月25日の日本語活動は、入管法「改正」と特定技能2号の職種の増加を取り上げたが、この回では、2時間の活動のすべてを松尾一人でファシリテートした。すべてを「見せる」ことが「育成」や「指導」につながると考えたからである。一人ですべてをファシリテートしたのはVECの歴史の中でこの回のみである。松尾自身、自分自身のファシリテーションを振り返るよい機会になった。この回の模様は録画されており、いつでも他のファシリテーターが見ることができるようになっている。今後の課題としては、ファシリテーターの担い手の裾野を広げていくことが挙げられる。これまでは、東京女子大学で日本語教育を学ぶ学生が中心的担い手であったが、より広く、周知するなり、公募するなりといった方策が求められていると認識している。

実は(2)と(3)に関して大きな課題になるのは、参加者やファシリテーターの確保に加えて、資金の問題である。VEC日本語活動は2014年に始動したが2020年まで、ファシリテーターは交通費程度を受け取ることがあっても原則的に謝金はなかった。VEC日本語活動をより持続可能な状態にするために、規約を作り会員制度や監査のシステムを整え、2020年8月に改めて結成総会を開き、「正式」な任意団体として再出発した。この結果、2021年度から文化庁の助成金を得ることができた。しかし、同一プログラムの助成金は継続しての応募が3年間しかできない。したがって、本稿を書いている2023年度が最終年度となる。新たな助成金を他団体から得るため、事務局とともにコーディネーターはかなりの激務となっている。事務局の疲弊の問題はVECのように運営体制が脆弱な団体ではある程度、共通した課題なのではないかと思われる。こうした自体を調整していくのも、多文化社会コーディネーターの役割であろうが現実的にはなかなか解決が容易ではない。

最後に(4)の「活動内容を社会に発信していく役割」について説明する。杉澤(2009)は、多文化社会コーディネーターには、情報の収集・編集・発信能力が必要なることを指摘している。実践で得られた成果や課題などを発信し合ってこそ、その「知」が共有の財産となるのではなかろうか。VEC日本語活動では、文化庁からの助成を得て、2021年度から2023年度まで、オンラインを中心とした各種セミナー、発信を実

施してきた。このセミナーのコーディネートもコーディネーターが務めてきた。こうした発信事業を支えていくこともコーディネーターの役割の一つであると考え。また、団体としての発信能力を高めていくことで、本活動の社会的認知度が高まり、活動の持続可能性も高まっていくものと考え。

以上、4つの観点で、VEC 日本語活動におけるコーディネーターの果たす役割を省察した。各地域の地域日本語教育の現場では、団体の統括コーディネーターと日本語教育のコーディネーターが役割を分担しているところもあるかと思う。一方で、VEC 日本語活動を継続し、支えていくためには、現状では、統括しているコーディネーターが、日本語教育の専門性ととも、多文化社会コーディネーターとしての専門性も求められていることを省察した。

8. おわりに

本稿で触れることはなかったが、VEC では、2018 年の 10 月に日本語活動とは別に日本語教室も開き、以降、継続している。それは、VEC 日本語活動で得られる学びとは異なる学習ニーズも存在しているからである。ひらがな、カタカナから学びたいという人や仕事や子育てなどの日常生活に役立つ日本語を学びたいという人などのニーズに応じている。新型コロナウイルスの蔓延、2021 年にミャンマーで起こった軍事クーデターの影響で、日本での滞在が中長期化しつつあるなか、学習者数が増加傾向にある。特定技能の枠拡大という政策の変化もこの日本語教室の在り方に影響を与えつつある。この VEC 日本語教室は、1 節で紹介した「社会への参加を目指した言語習得」をサポートするものであり、指導を日本語教育の専門家が担っている。

本稿では、VEC 日本語活動の紹介とともに、「活動におけるファシリテーターの学びと成長」、「活動における多文化社会コーディネーターの役割」に関し、省察を行った。大学院生、そして、大学院修了生を含むすべてのファシリテーターは、毎回の活動時に、必ず振り返りを文字で残し、共有する作業を行っている。しかしながら、各回の活動ではなく、VEC 日本語活動をメタレベルで、とことん省察する作業を行う機会はそれほど多くはない。筆者たちは 2022 年 12 月に多文化社会専門職機構 (TaSSK) が開催した「第 6 回多文化社会実践研究フォーラム」のラウンドテーブルにおいて、本活動に関し発表する機会を得て、本活動に関する省察に基づいた発表を行った。しかしながら、本稿を執筆するなかで、本活動における学び合いとはどのようなものであるのか、ファシリテーターとして

の成長や人としての成長、アイデンティティの変化などの在り方に関し、さらに深く向き合い、省察することになったと思う。

本稿では、ファシリテーターの学びを省察することはできたが、ビジターや日本語を学ぶことをも目的として参加している参加者の学びに関しては、取り上げることができなかった。継続的に活動に参加しているあるビジターは、「最初は、単純に日本語をやさしく教えたり、話すことで会話ができると思い込んでいたが、現状はそうたやすいものではないことがわかった。わかりやすく伝えることは、思うよりも簡単ではないが、あらためて自分なりに『学び』の楽しさを実感し、参加をしているのが現状である」と私信で述べている。今後の課題は、こうしたビジターやその他の参加者が学び合いとしての日本語活動の中で、何を学び、どのように自己成長をとげ、アイデンティティにどのような変化が生まれているのかも明らかにしていくことである。それによって、コーディネーター、ファシリテーターの本活動に関する省察がさらに深まっていくのではないだろうか。

活動が継続しなければ学び合いは生まれなし、省察も存在しない。500回を目指すというよりは、まずは、一回一回の活動を丁寧に継続していきたいと思う。

謝辞：本稿を執筆するにあたり、VEC 日本語活動へのビジター参加を継続している高橋ゆかりさんから、ビジターとしての学びに関し、多くの示唆をいただいた。ここに深くお礼を申し上げます。

[注]

¹ 文化庁『令和4年度国内の日本語教育の概要』

https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/r04/pdf/93920301_01.pdf (2023年9月24日確認)

² 法務省 在留外国人統計

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=12040606&tclass1=000001060399&tclass2val=0> (2023年9月20日確認)

³ 「在留特別許可」は、様々な事情で退去強制処分を受ける外国人に対し、法務大臣の自由裁量によって特別に日本国内での在留を認める特例措置のことである。

⁴ 「YANGON かるたプロジェクト」ホームページ

<https://yangonkaruta.jimdofree.com/> (2023年11月8日確認)

[文献]

- 杉澤経子, 2009, 「『多文化社会コーディネーター養成プログラム』づくりにおけるコーディネーターの省察的实践」『多文化社会コーディネーター養成プログラム—その専門性と力量形成』東京外国語大学多言語多文化教育研究センター : 6-30
- 高木光太郎, 2001, 「移動と学習 —ヴィゴツキー理論の射程」茂呂雄二(編)『実践のエスノグラフィー』3章, 金子書房 : 96-128
- 文化審議会国語分科会, 2019, 『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告) 改定版』文化庁
- 文化庁, 2022, 『令和4年度国内の日本語教育の概要』文化庁
- 松尾慎, 2015, 「地域日本語教育を問いつづける」神吉宇一(編)『日本語教育 学のデザイン —その地と図を描く』5章, 凡人社 : 101-122
- 山田泉, 2018, 「『多文化共生社会』再考」松尾慎(編)『多文化共生 人が変わる、社会を変える』凡人社 : 3-50
- レイヴ, J&ウエンガー, E, 佐伯胖(訳), 1993, 『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書